

あかかべじょう

赤壁城



苗木のお城には、むかしから、白い色をきらう習慣があった。

苗木城の祖先が、戦に敗け、洞穴にかくれたとき、飼っていた白い犬が、主人を見つけて追ってきた。それを敵が見つけて、殺されてしまったという。

人々が殺し合った、遠いむかしの話である。平和な時代になると、白い犬の話は忘れられ、ただ、白い色を嫌う習慣だけが残った。

苗木の城は、木曾川の深い淵の上に立っている。木曾川の兩岸は、岩山が多く、その中の、いちばん高い山にある。

山道を歩いてきた旅人は、とつぜん目の前が開らけ、青い水が豊かに流れる木曾川の岸辺に立つ。すると、空に、苗木城の赤壁をあおぎ見る。いかだ流しの人夫たちも、お城を目印にする。苗木の人々も、朝晩見るお城が、全国どこ

にもない赤壁であることが、何となく、ひけ目に思えた。

お城では、「白い色は、祖先からの、いいつたえもあり・・・。」という話もあったが、時代の流れということで、白壁にすることが決まった。

工事が始まった。村人が集められ、材木や土が集められ、馬や荷車が忙がしく動きまわる。急な坂道を、かけ声も勇ましく、運びあげる、城のまわりには足場が組まれ、みる間に、城全体が白くぬられて行く。

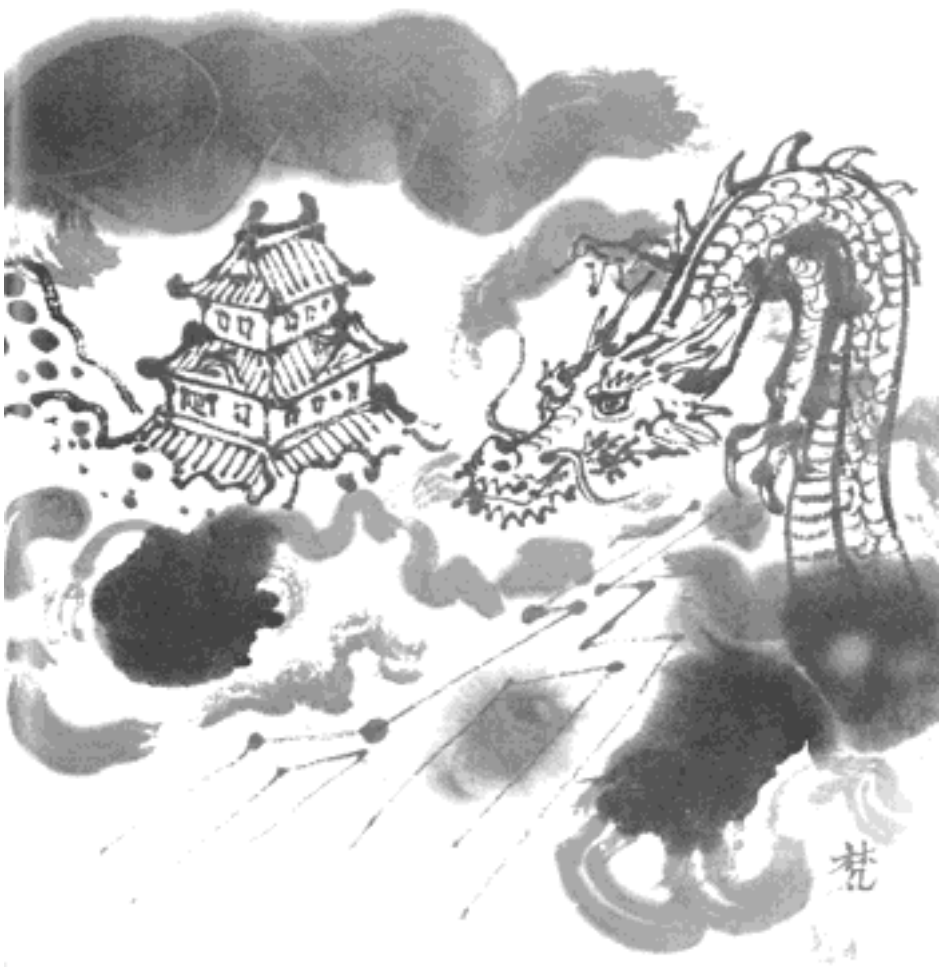
仕上がった時には、武士たちも村人たちも、思わずよろこびの声をあげた。

ちようど、春もなかば、青葉の中に、白壁の城が、浮き上ってみえる。

「苗木にも、自慢なものが、もう一つできた。」
と、人々はよろこんだ。

すると、突然、空が暗くなった。黒雲が、北へ北へと、限りなくのぼって行く。時どき、突風が、木の枝をゆすり、ちぎれた木の葉が、小鳥のように空に舞う。

「嵐がくるぞ。」



「早く家へ帰って、戸じまりをしる。」

人々は、おお急ぎで家へ帰ると、嵐のすぎるのを待った。

ひと晩じゅう、嵐は、雨戸をならし、立木をゆさぶり、屋根に何が、どかん、どかん、とぶつかる。人々は眠ることもできず、朝をまった。

夜明けとともに、嵐は去った。人々は、家のまわりや、田畑を見廻り、いたみぐあい調べて歩いた。ふと、空を見上げると、おどろいた。

お城がない。いや、まっ白なお城がなく、もとの赤い壁の城が、みすぼらしく、折れた木の枝の間に見えるだけだ。

お城は、ほとんど、こわれた所がないのに、白壁だけが落ちている。大きな鎌でけづり取ったように、無数の傷がついていた。

ふたたび、白壁ぬりが始まった。

お城は、前よりも、いっそう白くかがやいた。

とつぜん、風が吹き始めた。南の空から、黒い雲がわき出すと、夏の雷雲のように、またたく間に空をおおった。黒雲が、地面に低くたれこめ、夜のように、あたりが暗くなった。

はげしい雨が降りだした。かみなりが、腹にひびく、どどーん、どどーん、という音を、山から山へひびかせた。

木曾川の水は、みる間に増え、城の下の淵は、大きな渦をまきはじめた。火花が、雲から雲、山から山へと、飛び廻る。ひとときわ大きい火花が、渦のあたりではじけたと思うと、水柱が、渦のまん中から、天に向かって吹き上げた。水柱は、とてつもない大きな蛇のように、くねりながら、お城の天守閣を、いく重にもとりまいた。

地獄の底で、大きな歯車がきしむような音が、お城のあたりでひびきわたると、白壁が、だだだーんと、地面にたたきつけられる。

お城の中の人々が、戸のすき間からのぞいてみると、絵でしか見たことのない銀色の竜が、天守閣の屋根にあごをのせ、大きな二つの目玉を、ぐわっと見開き、こちらをにらんでいる。ひげが、空へ、のびたり、ちぢんだりしている。するどい爪が、壁を引っかいている。白壁は、そのたびに、大きなかたまりとなり、だだだーん、だだだーんと、ものすごい音をたてて落ちる。

殿様は、その竜の顔が、祖先の顔に似ているように思えた。きつと、祖先の

魂が、竜の姿であらわれて、白い色のいましめを、思い出させようとしているにちがいない。殿様は、祖先の、苦しかった時代のことを、忘れている今の自分のことを思った。

銀色の竜は、光とともに空にのぼり、やがて黒雲は四方に散り、青空が現われた。

人々は、しばらくは、夢をみているように、ぼんやりしてしまった。

それから、もう白壁をぬることもなく、赤壁城と呼ばれ、苗木の人々も、それを自慢にした。

文・三宅 正幸

絵・藤原 梵

ひびの くらんど

日比野蔵人の死



日比野蔵人という人は、天皇に仕える、身分の高い人であった。

そのころの都では、口の上質な人や、陰で、ひとを、おとし入れる人たちが、力を持っていたので、正直者の蔵人は、都がいやになり、自由の身になって、日本中を廻ることにした。

各地を廻って、苗木へ来た時には、春の始めで、新緑のむせかえるような平原が、見渡すかぎり、つづいていた。

東には、舟を伏せたような恵那山、西には、笠を伏せたような笠置山が、ひとときわ高くそびえている。

その山の間を、木曾川が、地面を深くえぐり、奇怪な動物の形の岩が、兩岸に立ちならび、その岩の間を、草木の芽が、あるいはうすく、あるいは濃く、ときには赤く、いろいろとっている。



蔵人は、美しさに、深く心をうたれた。鳥やけものも多いようなので、しばらく、この地に住んでみようと思った。

何日か過ごしているうちに、米や麦などの、人のたべるものが欲しくなった。平原の東に川があり、そのむこうに、十数軒の人家が見られた。川を渡り、人家に着くと、

「何か、たべるものを、分けてくれ。」
と、大声で、よびかけた。

村人は、蔵人の乞食のような姿に、恐れて、鍬をふりあげた。

「わたしは、賊ではない。それ、金も持っている。」
そういつているうちに、人々が集まってきた。

村人がよく見ると、なりは乞食だが、眼は、すんでやさしそうである。

（これは、立派な、お坊さんかもしれん。）
というので、村人たちは、御馳走を作ってもてなした。

蔵人は、都の近くには鬼が住んでいるが、本当に恐ろしいのは、鬼ではなく、御殿に住む人の心だといった。

「人の心が恐いというのは、なぜですかの。」
と、村人が尋ねると、

「鬼は、力づくで物を奪うが、何も無いものからは取りやせん。御殿に住む人は、気にいらん者は、罪をなすりつけて、殺してしまふ。」

海の話もした。

家ほどもある波が、次から次へとおしよせる話をして、村人は、なかなか信じない。紀伊の熊野神社のお札を見せると、

「この村に、神様をお祭りしたいと思っていた。ぜひ、そのお札をお祭りしたい。」ということ、小さなほこらを建て、熊野神社と名づけた。

その後、村人たちは、少ないなかからも、食べ物分け、蔵人も、鹿やいのししが取れると、村人に分けた。

蔵人が、身分の高い人だということを知ると、
「日比野様。」

と、村人たちが呼ぶようになった。蔵人は、

「今は、みんなと同じ村人だ。」
「といっても、」

「むしろに、くげ様の友達なんて、もったいなくて…。」
と、みんなの尊敬があつまった。遠くの村からも、名前を聞いて、尋ねてくるものもあった。

やがて、蔵人のことが、お城に伝わった。

お城の重臣たちは、

「村人たちを手なづけて、やがて、お城をのつとるつもりやも知れぬ。」

「早いにこしたことはない。」

と、何事か相談をはじめた。

そんなある日、その日は、よい天気だった。東の大牧ヶ原に、とても大きな雄鹿がいるという話を聞いて、蔵人は、鹿追いに行くことにした。

「だれか、わしといっしょに鹿追いに行く者はいないか。」

すると、村人たちは、家から顔だけ出して首を振った。不安におびえている。口をばくばくしているものも、ほかの村人におさえられた。

すると、裏手から、五人の農民が出てきた。今まで見たことのない顔である。

「日比野様、わたしが、お供しますに…。」

「お、いっしょにいつてくれるか。」

蔵人は、気楽にいったが、こいつらは、盗賊にちがいないと思った。それならいっそう、盗賊たちを引きつれていった方が、村のためにいいかも知れぬ。

歩きながら蔵人は尋ねた。

「おまえさんたち、どこの村の衆かな。」

「むしろは、大牧ヶ原のむこうの瀬戸村のものですわい。」

「ところで、日比野様は、都では、たいへん身分の高い方とか。」

「忘れた、むかしの事は。わしは、この村のひとりじゃ。」

五人は、顔を見合わせた。

「そんなえらい方が、なぜ、こんなところ



へ……。」

「こゝはいいところじゃ。人間どうし、争うこともない。人を疑うこともない。蔵人は、いいながら、」

「おまえさんたち、盗賊ではないか。盗賊でもいい。この村の人たちは、平和にくらしている。ここからは盗らないようにしてくれ。」

五人のなかのひとりが、たまりかねていった。

「わたしたちは、武士です。殿様の命令で、あなたの生命をいただきに来ました。」

蔵人は、おどろいた。

「なぜ、殿様がわたしの生命を……。」

「あなたが、村人をそそのかして、お城を取ると、殿様は、疑っておられる。蔵人は、」

「都の人の心のきたならしさに逃げてきたわたしが、なぜ、そのような……。」

「日比野様の気持ちは、よくわかります。けれど、われわれは、あなた様の生命をもらわなければなりません。」

すると、もうひとりが、

「あなたを殺したくない。ここから逃げてください。」

けれど、蔵人は、心を決めた。

「わたしは、もうどこへも行きたくない。殺すなら、殺しなさい。」

六人は、しばらく、だまって向い合った。

「では、ごめん。わたしは、あなたを殺したくない!!」

といいながら、刀を振った。

蔵人は、避けようとしなかった。

蔵人の死が、村に伝えられると、村人は悲しんだ。

お城から『蔵人は、城を取ろうとした大悪人。』という布令が出されたが、だれも信じなかった。

人々は、その名を忘れないようにと、この村を日比野村と名づけた。

文・三宅 正幸

絵・加藤 公雄

へびにのまれた薬売り

瀬戸から坂下へ抜ける瀬戸街道に、とてもやさしい顔をしたお地蔵さんがたっている。足もとには、清水がわいていて、いぼにつけるといぼがとれるといわれている。

このお地蔵さんは、「岩清水の地蔵」とも「横吹地蔵」「横引地蔵」ともよばれている。

日がかんかんと照りつけるまっぴるまのこと、富山の薬売りは、薬箱をせおって汗をふきふき、街道を歩いていった。

「あつうてかなわん、どこぞでひと休みしたいものだ。」

富山の薬売りは、あたりをみまわした。ちょうどよいことに、大きな杉の木があつて、その下がひかげになつていた。

「やれやれ。」

薬売りは薬箱をおろすと、ちよろちよろ、わきだしている清水で顔と手をあらった。そうして冷やした手拭いをおでこにのせると、薬箱をまくらのかわりにして、ころんと横になった。やがて薬売りはくたびれたのか、とろとろまどろんだ。

しばらくして薬売りは、息ぐるしくなつて目がさめた。いつのまにやら、日はとつぷりと暮れていた。

「おりよ、しまった、寝すぎたぞ。こんなところで、夜あかしはできん。」

富山の薬売りはあわてておきあがると、薬箱をさがした。まっくらな中で薬箱をさがしさがししておると、ようやく手のさきに薬箱がさわった。薬売りは喜んで箱をせおうと、まっくらな中をいさんで歩きだした。とたんに、とんと壁につきあたってしまった。

「これはこれは、寝ているあいだに谷そこへでもおちたとみえるわ。」

薬売りは、その壁をよじのぼろうと足をかけてみた。なんだかぬるぬるして、なまぐさいにおいがするが、いっこうに足はかからない。薬売りは、だん



だん息ぐるしくなつて、壁をあつちにさわりこつちにさわりました。壁とおもつたのは大蛇のはらの中であつた。

大蛇は清水をのみにきて、ぐつすりねこんでいる薬売りをみつけた。

「これはいいあんばいに、ごちそうがころがつておる。さっそくいただきますよようか。」

大蛇はちようどはらがすいておつたもので、パクリとひとくちで富山の薬売りと薬箱をのみこんだのであつた。

「はようここからでんと、体がとけてしまふぞよ。」

薬売りは、なんとか大蛇のはらの中から、ぬけだしたいものだとおもつたが、なかなかいいかんがえがうかばない。富山の薬売りは、くらやみでくびをひねつて思案した。するうち、ひょいといいいかんがえがうかんだ。

「そうだ、これにかぎるわい。」

薬売りは、あわててせなかの薬箱をおろすと、中をさぐつてみた。そうしてありつたけのくだし薬を手にすると、大蛇のはらの中におもいきり、ばらまいた。やがて、大蛇ははらがいとうなつて、トッテン、パツタン体をくねらせ

た。大蛇のくるしみは、しだいにひどくなって、石をはねとばし、木をなぎたおし、あたりかまわずのたうちまわった。

富山の薬売りは、薬箱をしっかりとかがえて、蛇のはらの中でじつとうずくまっていた。大蛇はもだえ、そのうち、こらえきれなくなって、汚物といっしょに、スッペラポンのポーンと富山の薬売りを体のそとにはねだした。

薬売りはやれたすかった！とほっとしたが、大蛇はくるしんで、くるしんで犬帰りまでたどりついた。そうして、道にながながとのびておった。

そこをとुरりかかったのが、春木おろしのわかもので、道にのびておる大蛇をみて

「おんしは大蛇か、丸太かや、おれはこれから山へいってくる。帰りにまんだここにころがっておりや、よきでたたききるぞ。」

といった。わかものが山からの帰りにみると、まんだ大蛇が丸太んぼうのよう

にころがっておるもんで、
「さっきのやくそくどつり、たたききってくれる。」
といって、よきで大蛇をきって、木曾川へなげこんだ。



大蛇のたたりをおそれてたてられたのが、岩清水のお地蔵さんだといわれている。

文・三戸 律子

絵・大橋 寿美代

家を追われた嫁さん

——安子穴の由来——



むかし、嫁にきて、三年間の間に子どもができぬときは、家を追い出されたものだ。

安子という娘は、気だてのよい娘だった。嫁に行っても、夫をだいじにするし、しゅうとめ（夫の母）のいう事はよくきくし、朝早くから夜おそくまで、よく働くし、村一番のよい嫁だといわれていた。

それが、どうしたことが、三年たっても、子どもができない。夫も、しゅうとめも、困ってしまった。

「あんないい嫁を、追い出しとうない。」
と、しゅうとめがいえば、夫は

「よい嫁じゃ。おつかさん、安子を、このまゝ置いておくわけにはいかんもんか。そのうちに、子どもも、できるかも知れん。」

と頼んだ。

「ばかこくでない。わしだって。追い出しとうないことは、わかっておろうが。でも、世間がゆるさんで…。」
しゅうとめの目も悲しそうだった。

とうとう、三年が過ぎて、安子は、家を出なければならなくなった。夫は、安子をよんで、

「おれは、今でもお前を好いとる。お前がこの家を出たとて、行くところのないことも知っとる。だけど、世間がゆるさんで、かんべんしてくれ。」
安子がかねて覚悟していたことなので、こっくりとうなずいた。
夫としゅうとめはたくさん金や、たべものを与えた。

さすがに別れはつらいもの、ぐずぐずしていて昼ごろになってしまった。安子は、何度も、何度も、家を振り返り、泣きながら家をはなれていった。

行くあてもないので、夜は、道ばたのお堂でねた、朝早くおきると、また、とぼとぼと歩いた。家が遠くなるのがつらくて、ゆっくり歩いた。

村はずれにくると、一人のおばあさんに出合った。



「ありや、安子でねえか。やっぱり、追い出されたか。」

安子は、うなずいた。

「かわいそうなこつた。今日は、ゆっくり、わしんとこで休んで行くがよい。」
「というので、誘われるまゝ、昼までいた。」

すると、おばあさんが、

「村のはずれに付知川がある。その川を、少し上ったところに、お不動さまがある。お不動さまを、拝みなされ。毎日拝めば、願いがかなえられるかも知れん。そばに、ほら穴がある。そこに住めばよい。」

と、教えてくれた。安子は、そこに住み、毎日、お不動さまを拜んでくらすことになった。

村人たちは、安子の話を聞くと、かわいそうに思って、食べ物運んだり、なぐさめに来たりした。

幾日か過ぎるうちに、安子は、だんだん居づらくなってきた。お不動さまが願いをきいてくれないと、村人たちにすまないという気持ちで、強くなってきた。

明日は、ここを出よう。今日は、こゝを出ようと思ううち、何となく、すっ

ばいものが、たべたくなってきた。

安子が、おばあさんに話すと

「それは、めでたい。お不動さまが、願いを、かなえてくださったのじゃ。」
というと、村じゅうに知らせた。

夫もしゅうとめもかけつけて、安子は、無事に、家へ帰ることができた。

それから、安子は、子どもを生んで、一家が楽しくくらしただろうな。

安子の住んでいたほら穴を、村人は、安子穴とよんで、今も、お不動さまにお参りする人が多いそうだ。

文・三宅 正幸

絵・藤原 梵

ひげを落とした巡査さん



わしのいとこに、六尺近い大男で、力も強く武術もよくできる人がおった。

その人は、明治政府ができる、運よく、じゅんさに取り立ててもらい、若いくせに、鼻の下に、太くて黒い八の字ひげをはやして、いつも、人差指と親指の先で、ひげをピンとねじり上げておるのが、大のじまんだった。

明治十年の年のくれのことだった。朝からしぐれもようの日で、どこの家でも、お正月をむかえるしたくにいそがしかった。

わしの家でもせわしかった一日がくれて夕飯がすむと、とうさまは書齋に引きこもり、かあさまは女中といっしょにお勝手の後片づけをすませ、戸じまりを見回っておられた。

ちょうどそのとき、どこか遠いところから、ワァーという声が風にのって聞こえてきた。かあさまが聞き耳を立てると、日比野の台地あたりで、パシッパ

シツと木のはぜるような音がして、裏口のしようじに、赤黒いかげがうつった。「火事だ、火事だ！青山さまのお屋敷が火事だッ。」

という声が、とぎれとぎれに聞こえ、その声のあいまに、ワァーッ、ワァーッ、という、ひめいとも、かんせいともつかぬさげび声があがるのが聞こえた。

裏口をあけて見ると、高台にある、青山さまの屋敷のあたりに赤い火が見え、黒けむりが、もくもくとあがり、人々がうろろするるのが、かげえのように見えた。かあさまは、くるものがきたと、さとられたそうなの。

青山さまは、国学をまなんでいた方で、まえまえから幕府の政治をやめて、『日本の国の政治を、古い政治のしくみにもどし、神をまつり、天皇中心の政治にあらためて、新しい国をつくる』という考えの方だったので、明治維新のときには、いち早く天皇方につくことを、お殿さまにおすすめになっていた。

それで、お殿さまは、ほかの大名よりも早く、自分から苗木の領地を、天皇方にかえし、苗木藩の家来たちにも、武士の身分をすてて、農民になるようにとおすすめになった。苗木藩は苗木県にかわり、お殿さまは、苗木県知事にな

られて、青山直道さまも、二十四才の若さで県知事を助ける大参事（副知事）の役につかれた。ほかの武士たちは、農民にさせられたので、今までのように、殿さまからふち米や給金がもらえなくなった。そのうえ、早く農民になっていたので、新政府から武士がもらえなくなった金も、もらえなかった。

青山さまは、新しい日本をつくるには、佛をおがむことをやめて、神さまだけをおがむようにかえることがいじだと、信じておいでだった。どの家も、まつつてあるご先祖さまのいはいと、佛だんを、のこらずやきすてよ、苗木中のお寺も、お堂も、全部うちこわし、やきはらって、誰もかも、神さまだけをまつつておがむようにせよと強くおめいじになった。

三百年この方、大切にまつつておがんできた佛さまや、お寺をこわすことは、人々にとつては、ばちがあたるほどもつたいたなく、死ぬほどおそろしいことだった。あまりのかなしさに、佛さまといっしょにやけ死のうとした者もおった。

その上、青山さまのやり方に、少しでも、反対したり意見をはさんただけでも、重いばつをうけた。殺された者もいて、むりやりしたがわせようとされる青山さまを、人々は、ひどくおそれ、また、たいそうにくんでいた。

「いつか、きつと、殺してやる。」
と、口ばしる者まであった。



やがて、火事も下火になりだしたところ、ヒタヒタとかすかな足音がして、お勝手口を、ホトホトと、たたく者があった。

「もし、ご家老さま……。ご家老さま……。ここを、おあけくたされ……。」

低くて、の太いその声は、聞き覚えのある声だった。かあさまが、

「どなたやえも、今開けてあげるでなも。」

と、お勝手口へ行ってあげられると、ほおかむりした男が二人とびこんできた。「ご家老さまにお取りつぎを……。今、あの、にくい大参事の家に、火をつけてまいりました。どこにもにげばありません。どうぞ、おかくまいを……。」

かあさまは、とつさに、二人の武士を家の中に入れると、かたくお勝手口をしめて、とうさまに知らせにいかれた。

わしの家は、家老の家だった。

とうさまは二人を見ると、だまって、書斎につれてはいられた。

「年のくれの二十八日ならば、大参事も、県庁から家に帰ってきていると思つて、わしら、四人で殺しに行きました。口に短刀をくわえ、手にじゅうをもつて、高いへいをのりこえてとびこみましたが、奥ざしきには、奥さまが

お子に学問をおしえておいでになっただけで、どこにも大参事の姿はみえませなんだ。『青山は、まだ帰っておりませぬ。おうたがいならどこでも、おさがしなされ。』と、きちんとすわっておいででした。」

「わしらは、どこかにかくれておりはせんかと思ひ、なやから馬屋、みそべやに、くらの中までくまなくさがしましたが、どこにもおりませぬ。くやしくて、とうとう、屋敷に火をつけてきました。」

「二人の者は家に帰ったが、わしらは二人は帰る気になれず、にげてきました。ここが一番安全でございます。どうか、おかくまいください。」

とうさまは、じつと腕を組んで聞いておられたが、かりにも前までは苗木藩の家老だったし、今こうしてにげこんできた、武士たちの気もちもよくわかり、そうかといつて、いつまでもかくまい通すこともできるはずもなく、何とかして二人を遠くへにがしてやりたいと考えられた。

とうさまは、かあさまにも家の者にも、二人の来たことは、誰にも言つてはならぬと、固く口止めされた。

火事がおさまったと思つたとき、ガツチャン、ガツチャンと、くつ音がして

来て、玄関をドンドンとたたいて、

「おじ上、おじ上。」

と、大声でどなる者がおつた。かあさまは、とつさに二人のはきものをかくすと、玄関をあけられた。

ドストドスと入つて来た者は、あの八の字ひげをピーンとはやした、いとこのじゅんさと、もう一人の見知らぬじゅんさだった。

「おば上、ひどい事になつたわなも。青山さまのお屋敷が丸やけになつてしまつて。石戸んたあのやつた事だとはお調べがついている。あいつら、前々から、殺してやると、いきまいていたでなも。それにお屋敷の下男たちが顔を見ている。村井さんたち二人はつかまえたがあの二人がつかまらん。ひよつとすると、あいつら、ここににげこまんだかえも……。」

その大声は、家中につつぬけで、奥の書齋までまる聞こえだった。

とうさまは、とつさに床の間の掛じくの裏の壁に手をかけられた。そこは、ドンドン返しの壁で、ぱつと穴があくと、二人をおしこんで、

「しゃべるな、動くな。助けに行くまで、このかくし間でじつとしておれ。」

と早口でいわれて、ドンデン返しの壁をスツと元に戻すと、知らん顔で書齋にすわっておられた。そこへ、八の字ヒゲをはやしたいところがはいつていった。

「そうぞうしい。誰も来はせん。家中さがしてみよ。」

といわれた。八の字ヒゲのいとこは、家中さがしまわつて、座敷へもどると、「やつらが、にげこむならこの家だで、おじ上、ここで待たせてもらうでなも」といつて、書齋の横の座敷に、デンとすわりこんでしまった。

とうさまは、かあさまに目くばせして、

「弥兵工次に、夜食を食べさせて、ふるへでも入れてやれ。」

と、お命じになった。かあさまが夜食をだすと、二人はガツガツと食べて、かあさまのわかしなおしたふるへ入ることにした。

ふる場へ行つた八の字ひげのじゅんさは、そのヒゲをピーンとひねりながら、「あいつらがくると、幼なじみやで、わしのこの八の字ひげをみると、すぐ気づいてしまう。何かいい工夫はないかのう。そうだ、このヒゲをすりおとして、百姓の着物を着とれば、よもやわしとは気づかず、ゆだんしとるにちがない。あす、ひよつと渡して会つても気づかれずに近づいてつかまえる

事ができるわい。おば上、かみそりとかがみをかしておくれんされんか。」

かあさまが、かみそりと、かがみを出してやると、弥兵工次さは、

「せつかく毎日手入れして、これまでのひげにしたのに、おいしいこつちや。おいしいこつちや。」

といいながら、さも、ざんねんそうに、じまんの八の字ひげを、ザリツ、ザリツと、そり落してしまわれた。

ドンデン返しの次のかくし間は、かあさまの部屋の押入れに通じていたので、ひげをすり落している間に、とうさまは、二人を、そつと、かあさまの部屋からえんがわに出して、裏庭のうえこみの木の間から、裏山づたいに木曾川の渡しの方へ行けるように、にがしてやられた。

「苗木領内は、あぶないで、木曾川を渡り、名古屋の方へでもにげてみよ。」といつて、かあさまに作らせたにぎりめしを持たせて、そつと送り出された。

だが二人は、にげおうせずに、ほかのじゅんさにつかまえられたそうな。

わしが大きようなつてからきいた話じゃが、にげた二人が、そのとき、ドン



デン返しのかくれ間にひそんでいた事を知りたいとこのじゅんさは、

「あのとき、おじ上の家に、ドンデン返しのかくれ間がある事を知っとつたら
じまんのひげをすらんでもよかったのに……。それに、この手で二人をつか
まえて手柄にできたに……。今思っても、ほんにおいしいことをしたわい。」
と、いつまでも、くやしがりたり、おしがりたりしたそうなの。

「八の字ひげをすり落したときの、弥兵工次さの顔は、そりゃあ、だだっぴろ
いだけの、何ともしまりのない顔で、みるのも気の毒じゃったでなあ。」

「おまけに、笠松からきたえらいじゅんささまに、弥兵工次さの方が、あやし
まれてつかまっつての、おかしいやら、むごいやらでの……。」「
と、いつも、いつも、話してくだされた。

わしは年を取った弥兵工次さの顔を見るたびにかあさまの口ぐせを思いだし
ては、わらいをこらえておったものよ。

文・青山 のぶ子
絵・大橋 寿美代

おとめやぶ

むかし、若者の家のうらに、ひとにぎりのやぶがあった。小石がごろごろして、小さな木や草が、ひよろひよろ生えているだけの、まずしい土地だった。若者のおじいさんが、

「あのやぶを、だいにせにやいかんぞ。家族のものが、どんな薬でも治らぬ病気るとき、あのやぶで黒い蛇をさがすことだ。」
そういつて、死んでいった。

それから、幾年かたった。若者は、妹と二人、せまい土地だが、平和に百姓をしてくらしていた。

ところがある日、お城のお姫さまが、重い病気で、どんな薬でもなおらぬ、というつわさが、若者のところにつたわってきた。

お姫さまといえは、若者は、たった一度だけ、見たことがある。



若者の妹と同じぐらいの年で、かわいらしく、眼がとても美しかった。そのときから、若者は、お姫さまときくと、何となく心が暖かくなり、働いていても希望のようなものがあつた。

もし、お姫さまが、死んでしまったらと思うと、若者は、じっとしておれない気持ちであつた。

お城では、花村瑞軒という医者が必要が夜も寝ずに、お姫さまの看病したが、

「もう、こうなつては、何でもやってみる事です。国中のめずらしいものを集めてください。」

と、殿様に申し出た。

殿様も、わが子の生命をたすけるためには、何でもやってみようと思つたので、さつそく、国じゅうに命令を出した。

冬には珍しいひき蛙だといつて持つてくるもの、大むかしのつぼのかけらを持つてくるもの。人もめつたに行けない山奥の黒い百合の花、大波が、いつもぶつかる海岸の、岩に住んでいる鳥の卵など。

けれども、お姫さまの病氣は、治らない。

若者は、とうとう、我慢できなくて、妹に相談した。

「あのやぶの黒い蛇をさしあげてはどうだろう。」

妹も、やさしい心の持ち主だから、

「お兄さんが、そうしたいのなら、そうするといいわ。お姫さまが死ねば、お

殿さまも、国じゅうのみんなも、悲しむから。」

若者と妹は、一日がかりで、黒い蛇をさがし、お城へ持つていった。

さつそく、花村瑞軒が、黒い蛇を黒焼きにしてお姫さまに飲ませると、たちまち、ききめがあらわれ、お姫さまは、けろりとなおつてしまった。

殿さまはやぶの話をきくと、

「これは、国の宝だ。だれも入らないように。」

と、命令した。それから、村人たちは、おとめやぶと呼ぶようになった。

ところが、しばらくして、こんどは、若者の妹が重い病にかつた。どんな薬もきかない。若者は、お役人に願ひ出た。

「だめだ、だめだ。たとえお前の持ち物でも、今は、お国のものだ。」

そこで、若者は、何としても妹の病いをなおすため、おとめやぶへ入つて黒

い蛇を見つけてきた。

妹の病気は、すぐ治ったが、訴える人があって、若者は役人につかまってしまった。

死刑になるところを、お姫さまの命乞いで、生命だけは助けられたが、国を追い出され、行方知れずになった。

それ以来、おとめやぶへ入ったものはない。

文・三宅 正幸

絵・高橋 錦子

ばこんちん

馬魂鎮



苗木城の西の方に、木曾川と付知川にはさまれた台地が広がっていて、津戸といった。そこには昔から街道が通っており、木曾川の渡しがあった。

古い街道は鎌倉街道で、津戸のまん中を横切り、けわしい岩山を下って、木曾川の渡しに出ていた。江戸時代には並松が原から津戸の西はしに向って、南北街道が通り、急な岩山をおりて、木曾川を渡り坂本村へ出ていた。

明治の初めでも、木曾川の近くは深い山で、うっそうとした竹やぶがあちこちにあって、街道わきには大木もしげり、昼でもうす暗くさみしいところだった。

ときどき狼が出てくる山里で、家も、七、八けんしかなかった。その中に、一けんだけ、『岩井屋敷』とよばれる大きな家があった。南北街道のそばにあって、屋号も『大家』といった。大ぜいの作男や下女をつかって、百姓仕事

をさせ、家畜もたくさん飼っていて、大へんなおだいじんだった。

ある日、主人は作男に、近くの下手が原へ行つて、山草をかるようにいつけた。作男は、一番力の強い馬のアオを引き出して、馬の背に木のくらをつけ、いつものように鈴もつけて、シャンシャンと山草がりに出かけて行つた。

ところが、その日、夕方になつても帰つてこん。家の者は心配して、戸口を出たり入つたりして待つておつた。

やがて、人の顔もうすぼんやりとしか見えんほどになつたころ、シャンシャンと鈴の音がしてきたので、やれ、ぶじに帰つてきたと、よろこんでとび出て見たが、アオの姿しかよう見えなんだ。

作男は、アオの後ろからくると思つて、すかして見ておつたが、いつこうに人影は見えなんだ。アオは利口な馬やで自分でさっさと帰つてきたものと思つて、家の者は、

「ああアオか、よう帰つた。」

といつて、そばへよつていつた。ところが、おどろいたのなんの……。



「だ、だ、だんなさま、アオが、アオが、うでをくわえてきました。」
主人は、びっくりして、奥からとび出してきて、アオのくつわをつかんだ。くわえてきた物をつかもうとすると、アオは、ヒヒーンといかないで、顔を下手が原の方へむけると、カッ、カッと、ひづめで土をけちらしていた。
主人は、たいへんおこって、馬のくわえてきたうでを引っばると、アオはおとなしくそれをはなした。そしてまた、ヒヒーンヒヒーンとないて、カッカ、カッカとひづめをならして、おどくっておった。
主人が取りあげたうでを明りにてらしてみると、まぎれもなく作男のうでで、まきついていたやぶれ布は、けさ着ていったはっぴのそでだった。主人は、元郷土で、明治になる前までは殿さまにつかえた武士だったので、人の道にはずれたことはゆるせんのだ。
「いくらわしのかわいい馬でも、人間をくいころすなんてゆるせん。やっぱり畜生か。このかん馬めを、生きうめにして、思い知らせてくれる！」
と、カンカンにおこって、作男たちに、きつく言いつけて、竹やぶのそばの畑のすみに、馬のすっぱり入る穴をほらせた。



その穴へ、あばれるアオを、作男たちに言いつけて、引きずりこみ、たたきおとして、馬の首だけ出して、生きうめにしてしまった。アオは目にいつぱい涙をためて、ヒヒーンとかなしげにないては、家の者の行く先をじつとみつめておった。

それから、七日七夜、みんなは作男をさがしつづけた。その間じゅう、アオはかなしげに、ヒヒーン、ヒヒーンとなきつづけ、そのなき声は、日一日と弱まっていた。七日目の真夜中になってもまだかすかなきつづけていた。

八日目の朝、アオは、顔を西の方に向けて死んでおった。

その日、狩宿のりょうしが、えものを追って、つい品の字岩の方へ迷いこんだら、木曾川へつき出した大岩のわれ目に落ちて、死んでいる作男を見つけた。そばには、アオがつけていた木のくらが落ちていて、狼がキバでかみくだいたあとが、そこらじゅうについておった。

そのことがあってから、いく日かたったある日、津戸の若者たちが、二、三人

でとびの巢のへんで、たき木を切っていたら、狼の群がおそいかかり、一人が鉄砲を持っていたおかげで、追いはらうことができて、ほうほうのていでにげかえってきた。

それからまたしばらくしたら、日がくれて南北街道を通っていた村人が狼におそわれ、血だらけになって、近くの人家ににげこんで助けられた。それからも狼におそわれる者が、でるようになった。

そのころから、南北街道を日がくれてから通ると、風の音にまじって、シャンシャンという鈴の音と、ヒヒーン、ヒヒーンと、かなしげになく馬のなき声と、どこからともなく聞こえてくるようになった。空耳かと思ひ、聞き耳を立てると、はたとやむが、歩き始めると、また聞こえてくる。そのなき声は、どこまでも追ってきて耳の底をはなれなかった。

村人は、誰いうとなく、アオは利口で強い馬だったから、作男が狼におそわれたことを主人に知らせるために、狼をけちらして、うでをうばってきたのだというようになった。

アオの本当の心を知った主人は、自分のしうちをくやんでもくやみきれなかった。主人はねんごろにアオの供養をして、石碑を立ててやり、朝晩、家者たちがおがんで、アオのめいふくをいのった。年に一度、春にはおまつりをして魂をなぐさめた。

それからあと、ピタリと、鈴の音も、馬のかなしげななき声も、誰にも聞こえなくなつたということだ。

文・青山 のぶ子

絵・吉村 茂夫